9.11後の世界を撃つ

Shooting the world after 9.11

国際協力講座の歩み 2000－2008

東京外国語大学大学院地域文化研究科
国際協力講座

目　次

序　2

第一部　グローバルスタディーズ　5

第二部　連携講座　45

関連刊行物一覧　58

グローバルスタディーズ：活動一覧　59

連携講座：活動一覧　60

あとがき　62

序

東京外国語大学大学院国際協力講座は、すでに発足していた国際文化講座とともに、本学大学院の専任講座として、2000年度より西谷修（教授、思想文化論）と中山智香子（助教授、現准教授、経済思想史）の着任によって発足しました。当時、本学には大学院専任講座としてはこの二つがあるのみでしたが、本講座が外部機関との協定のもとに運営される連携講座をサポートすることで、大学院の研究教育の充実を図るとともに、プロジェクト推進型の活動を展開する体制が徐々に整えられつつありました。

その後の本学の大学院講座整備の方向転換や、とりわけ国立大学法人化などの影響で、本講座の成立当時とは大学内外の状況がだいぶ様変わりし、この環境に対応すべく大学全体の方針として2009年度からは大学院が部局化され、ほとんどの教員が新たに組織される総合国際学研究院に所属することになりました。これにともなって、本講座を含む従来の大学院専任講座は解消され、研究院に吸収されることになります。

この間、2000年度の発足より、国際協力講座は当初は国際文化講座（上村忠男教授、2002年度で退職）と協力して、開設の趣旨どおり研究プロジェクトを積極的に担う大学院専任講座として、さまざまな活動を展開してきました。

その際に基本的な方針としたことは、組織的に行う共同研究をできるだけ世界のアクチュアルな状況に関連させてゆくということ、そして研究作業をつねに社会に公開してアカデミズムに自閉しないコミュニケーションの回路を開いてゆく、ということでした。そのために本講座では、研究プロジェクトに外部の人びとの参加を求め、また公開シンポジウムを行うにも、一般の人びととの共通の関心を喚起するヴィジュアル映像等の展示を行う、といった工夫を重ねてきました。そしてさらに、ある時期からこれらの企画については極力記録を作るようにしてきました。企画の実施に加えた記録の整理には、また膨大な手間がかかりますが、それでも活用できる記録があることによって、企画の意味も持続的なものになります。また、それをもとにして、市販の書籍として成果を公開することもできました。その趣旨をまとめれば以下のようになります。

・アカデミズムの壁を開く
・研究領域の敷居をまたぎ越す
・研究とメディア等の実践現場とのパイプをつなぐ
・研究の場を社会に開く
・記録を作って発信性を高める

その努力もあってか、本講座の企画はしだいに多くの人びとに関心を寄せてもらえるようになり、新聞・雑誌等で紹介されるだけでなく、討論の内容が一般雑誌で公開されることもありました。

また、国際協力講座では、このような実践的研究の展開を教育の場にも還流させるために「グローバル・スタディーズ」の構想を打出し、2006年度より大学院・学部それぞれで同科目名で、現代世界を理解するための領域横断的な知の構築を試みています。

さて、冒頭にふれましたように、国際協力講座は2008年度をもって消滅することになります。この8年間(両担当者が着任した初年度はいわば「見習い期間」で独自の活動は行っておりません）本講座が何を行ってきたのかを振り返り、この機会にその活動記録をまとめておきたいと考えたしだいです。

なお、研究プロジェクトの費用は主として以下の外部資金によってまかなわれました。

・21世紀COE『史資料ハブ地域文化研究拠点』（国際協力講座はこのうち「21世紀地域文化研究班」の中軸を担いました） 2002～2006年度。

・科学研究費・基盤研究（B）「ネオ・リベラリズムと戦争の変容」（代表　西谷修）2003～2005年度。

・科学研究費・基盤研究（B）「戦争・経済・メディアからみるグローバル世界の複合的研究」（代表　西谷修）2007年～2009年（進行中)。

また、大学の国立大学法人化以後は、毎年大学院予算のうちから競争的経費の配分を受けており、これも本講座の活動の一部を支えてきました。

折りしもこの8年間は、アメリカのブッシュ政権の8年間、世界を「テロとの戦争」が席巻し、それが破綻して混迷だけを拡散させ田8年間に重なっていました。国際協力講座の活動もいきおり、この「新しい戦争」がもたらした世界と日本の激動に照準を合わせることになり、そこに現れた諸問題を、主として「戦争・経済・メディア」の観点からアプローチするものになりました。そこでこの小冊子のタイトルを「9・11後の世界を撃つ—国際協力講座のあゆみ2000—2008」とさせていただきました。

この間、さまざまなかたちで多くの方々のご協力をいただいています。学内外の方々、またその折々に大学や大学院に在籍して企画の準備運営等に協力を惜しまれなかった学生諸君、その他ご協力いただいた多くの方々にこころから感謝しております。国際協力講座が作る最後の記録となるこの小冊子を、何らかのかたちでわれわれの活動をお助けいただいたその方々に感謝とともに捧げさせていただきます。

2008年12月21日
東京外国語大学大学院
地域文化研究科・国際協力講座
西谷　修（教授）
中山智香子（准教授）

グローバル・スタディーズの基本概念

グローバル・スタディーズとは、20世紀末から急速に進行したいわゆる「グローバル化」と呼ばれる状況を、世界編成の根本的な変容と受けとめ、これによって現出する世界の諸現象とその意味を、その変容に見合うかたちで的確に分析把握し記述する視点を開き、グローバル化する世界に生じる諸問題に、人文・社会科学の枠を超えて領域横断的に取り組もうとする研究の試みである。

ここで目指される研究が、近年欧米で試みられているグローバリゼーション研究ないしはグローバル研究と関心を共有しつつ（とりわけ後者と）も異なるのは、グローバル化がニュートラルで普遍的な現象として捉えられるのではなく、西洋文明の世界化というひとつの歴史的運動の結果として現出した事態であるという、歴史地政学的な認識のうえに立っている点にある。そしてそこには、今日の世界を把握する知の枠組みそのものが、この運動を推進する原理となり、かつこの運動と手を携えて知的・制度的に世界を組織してきた当の枠組みだという認識が含まれている。したがってこの研究は、現在の世界で普遍的なものとして規範的に通用している知のあり方そのものの認識論的批判を、パフォーマティヴに遂行してゆくものでもある。

簡単にいえば、16世紀に始まった西洋の世界化運動によって、世界はひとつの全体的な活動圏として組織されたと言うこともできるが、この運動はそれが成就した時点で、もはや同化と統合の対象を失うことで臨界点に達したとも言える。そしてこの臨界状況が、いま世界に根本的な変容を引き起こしていると考えることができる。ただしこの変容は、世界化運動を推し進めた論理や組織方法を失効させるものであり、したがってグローバル化として語られる現在の世界の変容は、これまでとは違う論理によって別様に捉え直される必要がある。

グローバル化は国境をはじめとするさまざまな境界を透過する運動を含んでいる。だがそこで透過されるのは単に空間的な境界だけでなく、社会組織、規範体系、生命組織、ジェンダー等、さまざまなレベルでの差異秩序を含んだ、あらゆる類の制度的・規範的境界でもある。言いかえれば、「グローバル化」の外延は、一般に言われているような経済的レベルをはるかに超えて広がっている。したがって、あらゆるレベルでの境界の希薄化や領域の相互浸透を伴う「グローバル」な変容に関する研究は、従来の学問諸領域の成果を十分に活用しながらも、既存の対象領域に限定された研究にとどまることはできない。そのため、領域横断的、ないしは既存の領域そのものを問題化してゆく、それ自体が「グローバル」な観点に立つような構えが必要となる。

それゆえグローバル・スタディーズはひとつのディシプリンではない。それは、多様な領域の研究者の共同作業によって編み上げられ、検証や介入によって不断に編み変えられる、多面的なグローバル世界をめぐる知の網状組織の形成をめざしている。

キーワード
世界化／グローバル化／グローバリズム／ネオ・リベラリズム／民営化（私事化）／公共性／世俗化／政治－宗教／経済－政治／戦争／ＬＩＣ／テロリズム／暴力／帝国／ポスト・ナショナル／ポスト・コロニアル／移民（難民、強制移住、亡命）／マルティチュード／越境／アイデンティティ／国民国家／免疫／生－政治／セキュリティ（安全保障）／ジェンダー／ガヴァナンス（統治）／メディア／地政学　etc.

2001.12.4 中村哲講演会

2001 年秋、アフガニスタンは「9・11」に対する報復戦争の最初の標的となって、にわかに世界の注目を集めた。だが、79 年代のソ連侵攻以来、この国はすでに戦争と内戦の 20 年で荒廃し尽くしていた。アフガニスタンはいったいどうなっているのか、その生の状況をうかがうために、すでに 1984 年から隣国パキスタンのペシャワールを拠点に、医療を中心として活動を続けてきたＮＧＯ「ペシャワール会」の代表者、中村哲氏をお招きし、現地の実情について、「支援・協力」のあり方についてご講演いただいいた。日本の「テロとの戦争」への協力の問題もあり、ペシャワール会自体も注目を集める中で、池端学長も駆けつけてご挨拶いただき、多くの聴衆が中村医師の話に真剣に耳を傾けた。（企画・進行は中山）

2002.02.16「沖縄―記憶と映像Ⅱ」

2002年度、連続企画「記憶と映像」の第三回は、アメリカによるアフガニスタン攻撃という新たな「戦争」の到来を背景に、沖縄「返還」後30年を記念して、「復帰」をめぐるさまざまな問題を論じるシンポジウムを、沖縄から二人のパネリストを招いて開催した。また、この機会に、那覇で開かれた沖縄の写真家の写真展の一部を搬入して、即興の写真展を開催するとともに、いくつかのドキュメンタリーも上映した。（企画は上村・西谷）

沖縄―記憶と映像

――ヴィデオ上映＋パネル・ディスカッション――

主催　東京外国語大学海外事情研究所

日程：２００１年６月１６日（土）
１２：００～１６：３０　ヴィデオ上映（３作品連続）

２００１年６月１７日（日）
１０：００～１４：３０　ヴィデオ上映（３作品連続）
１５：００～１８：００　パネル・ディスカッション

会場：東京外国語大学府中キャンパス、１Ｆ・マルチメディア教室
※入場無料

■パネリスト：
仲里効（なかざと・いさお）：雑誌『EDGE』編集発行人、高嶺剛監督作品『夢幻琉球・つるヘンリー』の脚本担当
多木浩二（たき・こうじ）：批評家、『ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品」精読』（岩波現代文庫）ほか
港千尋（みなと・ちひろ）：写真家・多摩美術大学助教授、『記憶――「創造」と「想起」の力』（講談社）ほか
■司会：
西谷修（にしたに・おさむ）：思想文化論・東京外国語大学教授、『世界史の臨界』（岩波書店）ほか
上村忠男（うえむら・ただお）：学問論／思想史・東京外国語大学教授、『ヘテロトピアの思考』（未来社）ほか

上映作品

クリス・マルケル『レヴェル５』
（１９９６年、１０６分）

現代のメディア空間における特異なドラマ構成を通じた「オキナワ戦」へのアプローチ。死んだ夫の残した「オキナワ戦」のコンピューター・ゲームに日ごとログ・インするローラ。その不可能なランデブーをとおして、愛する者の不在のうちに「オキナワ」が徐々に喚起され、いくつかの記録フィルムや証言のモンタージュとそこにかぶさるクリスの語りによって、データ化されることのない戦争の経験とその不幸の質が重層的にあらわにされていく。クリス・マルケルは、ゴダールやアラン・レネらと『ベトナムから遠く離れて』の制作に参加しているほか、実験的な『ラ・ジュテ』や、『サン　ソレイユ』などのドキュメンタリー作品で知られるフランスの映像作家。

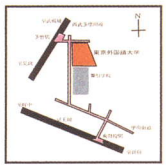
比嘉豊光『島クトゥバで語るイクサ世』
（２０００年、３０分）

（オジーオバーたちはもろに島クトゥバで五〇年前のことを昨日あったことのようにバーっと、喋るわけよ。戦争体験は集団自決とか日本軍の虐殺とかいっぱいあって、あまり喋らないだろうと思っていた。ところが、島クトゥバで喋らせたら感情をもろに出して喋る。これはすごいな～、と思った。もちろん写真も撮っていたが、写真よりも言葉のもつ力を感じた）。「イクサ世」（戦争の時代）についての現地の人びとの「島クトゥバ」による想起の記録。『ベトナムの傷跡』（１９９７年、３０分）を併映する。比嘉豊光（ひが・とよみつ）は１９５０年沖縄県読谷村生まれの写真家。

高嶺剛『夢幻琉球・つるヘンリー』
（１９９９年、８５分）

民謡歌手のつるはガジュマルの樹の股で「ラブーの恋」というシナリオを見つけ、作者のメカルに会いに出かける。ところが無頼のメカルは台湾に逃亡。残されたつるは息子のヘンリーとなんとかシナリオを映画化しようとする。沖縄の〈集合的記憶〉を形づくるさまざまな要素を、無意識の織りあげる破天荒な夢のように展開してみせた、奇想天外な現代沖縄ファンタジー。高嶺剛（たかみね・つよし）は１９４８年沖縄県石垣市生まれの映像作家。『パラダイス・ビュー』（１９８５年）、『ウンタマギルー』（１９８９年）などの作品がある。

■場所
東京外国語大学
府中キャンパス
研究講義棟
マルチメディア教室
（JR中央線「武蔵境」駅で西武多摩川線に乗り換え、「多磨」駅下車、徒歩３分）



問い合わせ先：
東京外国語大学海外事情研究所
tel 042-330-5405
fax 042-330-5406

2002年度

2002.12.8.（沖縄・記憶と映像Ⅲ）沖縄「復帰」後30年

2002 年度、連続企画「記憶と映像」の第三回は、アメリカによるアフガニスタン攻撃という新たな「戦争」の到来を背景に、沖縄「返還」後 30 年を記念して、「復帰」をめぐるさまざまな問題を論じるシンポジウムを、沖縄から二人のパネリストを招いて開催した。また、この機会に、那覇で開かれた沖縄の写真家の写真展の一部を搬入して、即興の写真展を開催するとともに、いくつかのドキュメンタリーも上映した。（企画は上村・西谷）

シンポジウム

同時開催写真展

東京外国語大学大学院
国際文化・国際協力講座
主催

沖縄［復帰］後30年

記憶と映像 Ⅲ

2002年12月8日（日） 10:00〜18:00

東京外国語大学研究講義棟2F227教室

JR中央線「武蔵境」で西武多摩川線に乗り換え、「多磨」下車徒歩3分

沖縄の「祖国復帰」が実現して、今年で30年になる。しかし「復帰」当時、日本への帰属は沖縄の人びとのあいだで満場一致の要望であったわけでは必ずしもない。「開化」か「自立」かをめぐって、激しい議論が闘わされた。そして、それ以後、とりわけ「自立」論の系譜のなかからは、「沖縄－日本」の対立図式そのものを内破する可能性をも産み出してきた。この可能性の産出にかかわってきた3人の方々を沖縄から招いて、「復帰」後30年を振り返る。

[1]写真展　10:00〜18:00　琉球烈像《フォトネシア／光の記憶・時の果実―復帰30年の波動》
[2]ヴィデオ上映　11:00〜14:30　『夢幻琉球・つるヘンリー』（高嶺剛監督作品 2000年）ほか1篇
[3]ディスカッション　15:00〜18:00　《沖縄：「復帰」後30年を振り返る》

ディスカッサント

川満信一（詩人・批評家：元「沖縄タイムス」記者）
仲里　効（批評家・写真家：APO代表・『EDGE』編集人）
宮城公子（日本近代文学・比較文学：名桜大学国際学部助教授）
上村忠男（学問論・思想史：東京外国語大学大学院地域文化研究科教授）
西谷　修（思想文化論：東京外国語大学大学院地域文化研究科教授）
米谷匡史（日本思想史：東京外国語大学大学院地域文化研究科教授）

写真・仲里　効

問合せ先
東京外国語大学大学院共同研究室
府中市朝日町3-11-1
tel/fax 042-330-5439
daigakuin-kyodo@tufs.ac.jp